

平成 21 年 4 月 28 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006 ~ 2008
 課題番号：18760398
 研究課題名（和文） 周遊パターンを考慮した観光地入り込み客数の推定方法に関する研究
 研究課題名（英文） Analysis of Visitors' Trip Chain Patterns and Estimation Method of Number of Visitors in Sightseeing Area
 研究代表者
 古屋 秀樹(FURUYA HIDEKI)
 東洋大学・国際地域学部・教授
 研究者番号：80252013

研究成果の概要：

観光地入り込み客数の推定に大きな影響を及ぼす観光周遊パターンが、観光客の行動性向によって大きく異なり、観光行動への意向調査データを用いた主成分分析、クラスター分析によるグループ間の差を確認することができた。また、観光入り込み客数データは、観光地整備にあたって重要な項目となるため、行政レベルで整備することが重要と考えられ、韓国やモンゴルで地域開発の方針と整合性を図りながら、モニタリングを行っていることが現地調査により明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,000,000	240,000	3,240,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：土木計画学・交通工学

キーワード：観光

1. 研究開始当初の背景

「観光立国」の推進の中で、個々の観光地整備は大きな役割を果たすと考えられる。観光地整備では、現在の来訪者数、来訪者意向を的確に踏まえながら、施設更新、各種情報提供を行う必要があるとともに、基礎的情報の分析、マーケティング分析に踏まえた科学的取り組みも重要と考えられる。しかしながら、基本的データである観光地入り込み客数についてみると、日本では情報量、情報の精度の観点から十分とは言い難い状況である。

2. 研究の目的

個々の観光主要地点（例えば、日光地域：大涌谷、芦ノ湖など、富士五湖地域：各湖や

ビジターセンターなど）における来訪者数の推定をより精度高く行うことを目的としている。

このような地点別入り込み客数は、入場者管理を行っていない観光地点で導出することが困難である。また、複数箇所をまわる周遊形態、季節変動に代表される非定常性も、推計を困難にしている 1 原因としてあげられる。各都道府県によって入り込み客数統計値が公表されているものの、入り込み客数推定地点、季節別変動の考慮や統計値精度の観点から、一層の改善が見込まれるところである。

そこで、本研究では、(1)周遊パターンを考慮した入り込み客数算出方法に関する検討、

ならびに(2)実査方法を考慮した調査手法の検討, 以上を具体的に検討する予定である.

3. 研究の方法

研究目的(1)周遊パターンを考慮した入り込み客数算出方法に関する検討, ならびに(2)実査方法を考慮した調査手法)を達成するために, 観光周遊行動の実態把握をアンケート調査によって明らかにするアプローチ(4.における, に相当), ならびに諸外国におけるデータの整備状況をはじめとした観光行政の把握(4.における に相当)を現地調査(ヒアリング, 資料収集)を通じて明らかにするアプローチを採用した.

4. 研究成果

諸外国の観光への取り組み状況

モンゴル, 韓国を対象として, 観光に対する行政や関係機関の取り組み状況の実態把握ならびにその比較を通じた特徴把握を目的とした. これらに取り組む背景として, 2006年12月の観光立国推進基本法制定があげられる. 昭和38年に制定された「観光基本法」から約50年を経て全面改定に至ったものであり, 観光への機運の高まりと考えることができる. これら改訂された内容と比較しながら, 各国の観光に対する取り組みの特徴を組織, 予算, 計画体系・策定の観点から比較し, 我が国における効果的な観光振興・開発について検討した.

組織, 予算, 計画体系・策定の観点から, 観光への取り組み状況比較を行ったところ, モンゴルでは, 州組織との役割分担が明確であるとともに観光基金といった予算の裏付けを行っていること, 観光地開発に優先順位をつけていることが明らかとなった. 一方, 韓国では構想から実施までの計画体系が存在するとともに, 独自予算をもちながらマーケティング活動, 観光地開発を行っているKTOの存在が明らかとなった. これらの特徴は, 効果的・効率的な観光開発への1手法として位置づけられることから我が国への適用も考えられる. さらに比較対象国を増やし, より詳細な制度について検証することが, 今後の研究課題としてあげられる.

日本人観光者と外国人観光者の比較

国際観光地としての歴史背景を持つ日光, 箱根を事例として, 外国人観光者の行動・評価の特性を日本人観光者との比較および観光地の比較分析により明らかにすることを目的とする.

そこで, 日光と箱根の外国人・日本人観光者を対象に, 訪問箇所, 事前期待, 事後評価, 観光旅行に対する志向, 来訪回数, 個人属性などの設問項目を設定し, 英語版, 日本語版のそれぞれの調査票による質問紙調査を実

施した. この調査は, 2007年5月中旬~9月中旬の期間に, 両観光地合わせて12宿泊施設で宿泊客に対して行なった. 各宿泊施設において留め置き法で, 質問紙に回答を記入いただいた後, それぞれの宿泊施設において回収を行なった.

収集されたサンプル属性では, 性別構成を見ると, 日光・日本人観光者で女性の割合がやや高く, その他はほぼ半数に近い構成割合であった. 年齢構成は, 箱根・外国人観光者にアメリカ高校生が参加する国際親善団体の26名が含まれたことから10代の比率が他のサンプルに比べて高かった. 外国人観光者の居住地別構成は, 箱根はアメリカ, 日光はオーストラリアの比率が高かった. また, 再訪率は箱根・日本人観光者で11回以上が36%を占めており突出して高かった. 外国人観光者を比較すると, 2回目の来訪だった割合は, 日光8%, 箱根3.9%で, 日光の再訪率が上回っていた. 日光2回目来訪者13名のうち, 性別では男性の割合が高く(10名), 居住地ではアメリカ(5名), フランス(2名), オーストラリア(2名)の順で, アジア来訪回数では5回以上が8名と多く, 来日目的は「観光」(7名), 商用を含めた「その他」(4名)の順だった. はじめて来訪した観光者の割合は日本人観光者では, 日光33.3%, 箱根21%で日光がより高く, 外国人観光者では, 日光88.3%, 箱根92.9%で箱根がより高かった.

利用交通手段をみると, 外国人観光者では, 公共交通利用が日光で95%, 箱根で74%(貸切バス利用のアメリカ高校生団体を含めない場合91%)を超え, 日本人観光者では日光は約58%, 箱根は約24%だった.

次に, 観光旅行に対する志向をみると, 20項目中, 「新しい発見要素があってほしい」, 「スリルのある活動を楽しむ」, 「知識を増やしたい」, 「考え方が変わる経験をしたい」, 「行ってきた旅行の話をする」, 「言語障壁を越えてコミュニケーションを楽しむ」, 「できるだけ多くのことをする」, 「現地の人と交流する」, 「異なる生活風習を知る」, 「異文化へ配慮する」, 以上10項目の観光旅行に対する志向について, 日光, 箱根の観光地を問わず, 外国人観光者が高い重要度を示した. こうした志向の重要度の違いは, 同じ観光行動をしても, 国内観光の日本人観光者とは先行する心の構えや志向が異なり, それが評価の過程で影響を与えていると考えられる.

また, 立ち寄り行動に着目すると, 観光箇所立ち寄り率は, 日光, 箱根共に主要観光箇所公共交通を利用して観光をする外国人観光者が日本人観光者より高い傾向がみられた(日光:二社一寺, 箱根:芦ノ湖, 箱根関所, 杉並木). 特に箱根の日本人観光者は公共交通の利用率(23.8%)が日光(57.9%)に比べて低く, 観光行動において自家用車でド

ライブを楽しむ要素が高く、また、日光以上に来訪頻度の高い割合が高いため、観光行動の分散、多様化が顕著であった。

さらに、事前期待と事後評価の比較から、22 項目の観光行動に対する来訪前の事前期待の強さ(3段階,0~2),観光行動後の事後評価(5段階,2~2)の平均値をみると、箱根・外国人観光者では、どのサンプルよりも「富士山をみる」(日光は「世界遺産をみる」)に対する期待が高かったが、事後評価は顕著に下がっており、箱根観光において、世界的に知名度の高い富士山をみることを期待している外国人観光者が多い反面、その期待が実際の観光では実現できていない実態が示された。同じ観光地においても、来訪回数が多く、現地の情報に多く接する機会のある日本人観光者とは異なる評価プロセスを示した。

最後に、日光観光者の事前期待と事後評価の散布図を作成すると、日本人が右肩上がりの回帰直線となっているのに対して、外国人は傾きが緩やかである。これにより事前期待が小さいものの、実際の立ち寄りによって評価が上昇していることがわかり、情報提供等に課題があると推察される。この回帰式から導かれる予測値から 0.13 以上乖離する観光行動の項目に注目すると、日光・外国人観光者は期待が高かった観光行動である「世界遺産をみる」で事後評価でより高い評価を示し、事前期待より高い評価だったのが「山歩き」で、「土地の歴史」については事後評価が事前の期待に対し低く、日本人観光者でも同様であった。外国人観光者に共通していたのは、事前期待に対し事後評価が高かった「温泉」であった。

また、観光に対する志向の違いに起因する期待と評価の違いに注目すると、前章で示したように外国人観光者は、「言語障壁を越えてコミュニケーションを楽しむ」、「現地の人と交流する」、「異なる生活風習を知る」、「異文化へ配慮する」、といった志向への重要度が日本人観光者よりも高く、事前期待もそれに応じて高く、期待通り実現されなかった場合、事後評価はマイナスの外れ値となっていた。

以上の分析を通じて、日光、箱根に来訪する観光者が持つ観光行動前の事前期待と行動後の事後評価に、外国人観光者と日本人観光者で違いがあり、来訪する観光者の属性、来訪回数、利用交通手段にもそれぞれ特徴があることが示された。また、それぞれの観光地が持つ観光対象特有の課題も調査結果から示された。発地別の外国人観光者の特性や、より細分化した観光行動の特性を把握していくことも今後の重要な課題である。

日本・中国・韓国における観光行動の実態分析

日中韓それぞれのサンプルを対象として、国内宿泊旅行、国外旅行の実態把握を目的として、Web 調査を用いて 535 サンプル(日本:330, 中国:120, 韓国:88)のデータを収集して分析を行った。

Web 調査であるため、まずはじめに調査サンプルの構成比率について確認したところ、日本では、男性の構成比率が高く、中国では 20 代の比率が高かった。また、3 カ国いずれも 60 代以上の構成比率が低くなり、特定のセグメントの構成割合が高くなった。そのため、サンプル数がある程度確保可能な中で、時間的制約、予算的制約が大きく異ならないと考えられる会社員、公務員を取り上げて分析を行った結果、下記のこと明らかとなった。

(1) 観光情報入手時の利用媒体

中国、韓国では、インターネット、家族・友人の話、テレビ、新聞・雑誌が多かった。一方、日本ではインターネットも半数を占めるものの、旅行ガイドブック、旅行雑誌、パンフレットといった観光客自らの能動的な情報取得行動を前提とする情報媒体の利用が多かった。

(2) 国内宿泊旅行の特性

1 年間に国内宿泊旅行では、「観光」目的の参加率が中国:60%~韓国:82%の参加率となっていることに加え、帰省の発生原単位もある程度みられた。

(3) 国外旅行の特性

国外旅行発生原単位(回/年/人)は、日本:0.786, 中国:0.078, 韓国:0.396 となり、目的地、不満要因に調査国別の差異をみとめることができた。

各国別の大まかな実態が、本研究を通じて明らかにすることができたが、今後の課題として、観光行動の詳細な実態把握、個人属性を考慮した発生量モデルの構築が考えられるとともに、観光プロモーションのための施策考察がある。

外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析

日光と箱根を対象として、外国人観光者と日本人観光者双方の観光者の属性とともに、評価特性をアンケート調査によって明らかにすることを目的として分析を行った。

まず、日光、箱根への来訪者属性を明らかにした後、各地域の総合評価をみると、日光・外国人観光者、日光・日本人観光者、箱根・外国人観光者、箱根・日本人観光者いずれとも 4.0 以上となり、観光者は比較的大きな満足感を得ていることがわかった。さらに個別評価をみると、「9. 地域の人々と話す」、「10. 地域の生活に触れる」について外国人観光者の評価が高いことや、訪問地別では、両観光地において「3. 世界文化遺産/富士山をみる」

について外国人，日本人を問わず事前期待が高く，また，日光において「1.歴史的建造物」の事前事後双方の評価が高いなど訪問地による差違を確認することができた。

さらに，観光地に対する評価が，(1)観光者の評価パターン，(2)観光地特定要因，ならびに(3)両者の交互作用から形成されると仮定し，観光者のセグメンテーションを行った。その結果，12に区分けできるセグメントを導出し，主成分分析から導かれる9主成分について有意となるとともに，第II主成分（歴史軸），第V主成分（自然観賞軸），第IX主成分（自然体験軸）は，観光地特定要因が主成分得点に影響を与えることが明らかとなった。これらに関連する魅力が観光地に存在すると考えられ，全てのセグメントに対して魅力を増加させているといえる。さらに，この3つに加え，第IV主成分（オプション軸），第VI主成分（土産物軸）には，(1)(2)の交互作用がみとめられ，特定の組み合わせにより大きな相乗作用が存在することを統計的に明らかにした。これらにより，全サンプルをプールした場合やアприオリなセグメンテーションでは見いだせない評価パターンの存在を確認できたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

野瀬元子，古屋秀樹：日光・箱根における外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析，都市計画学会論文集，No.43-3，pp.595-600，2008.108(査読有り)

古屋秀樹，西井和夫，野瀬元子，呉戈，金賢：日本・中国・韓国における観光行動の実態分析，第37回土木計画学研究・講演集，2008.6，CD-ROM(査読無し)

野瀬元子，古屋秀樹：日光・箱根における観光者の行動・評価特性の分析 - 日本人観光者と外国人観光者の比較 - ，第22回日本観光研究学会全国大会研究発表会論文集，pp.249-252，2007.12(査読無し)

古屋秀樹：諸外国の観光への取り組み状況，第35回土木計画学研究発表会講演集，2007.6，CD-ROM(査読無し)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

古屋 秀樹(FURUYA HIDEKI)

東洋大学・国際地域学部・教授

研究者番号：80252013

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし